

離郷門信徒のつどい主催者アンケート報告書

浄土真宗本願寺派総合研究所 横井桃子
藤丸智雄

1、はじめに

東京・横浜・名古屋・大阪・福岡などの東京圏・都市圏への人口流出が止まらない。特に、東京・神奈川・埼玉・千葉の東京圏には日本の人口の25%が居住しており、首都への人口一極集中という日本特有の現象が生起している。

現在、宗派では「離郷門信徒のつどい」を奨励している。就職や進学などの理由によって、地方から都市部に移り住んだ人々への伝道方法のひとつとして始まったもので、主催は郷里（地方）に存立する一般寺院やそれらが集まって構成された組単位などである。宗派担当部である寺院活動支援部及び築地本願寺等の各会場では、主催団体に対して情報や会場の提供等をおこない、また宗派として、費用の一部助成のサポートをおこなうことで、スムーズかつ活発なつどいの開催を目指している。

寺院活動支援部が主体となって、この

「離郷門信徒のつどい」の主催者の「つどい」に対する思いや開催に関する課題・問題点を明らかにするために、アンケート調査をおこなった。本報告書は、その調査データをもちいて、質的データ分析によって実証的に検討した結果をまとめたものである。

2、調査概要

調査期間…2015年4月～2016年3月末

調査主体…寺院活動支援部（過疎地域対策担当）

調査対象者…上記期間内に実施された「離郷門信徒のつどい」45

団体の主催者69名

調査方法…アンケート票の個別配布による質問紙調査

調査内容…年齢、性別、これまでの開催回数、開催のきっかけ、出欠確認の方法、告知した人数と当日の参加者数、つ

どいの連絡係、つどいでの

金銭徴収の内容、参加者の満足度を上げるための改善点や課題、つどいを継続するうえで課題、会場の使用にあたっての意見や感想、開催に関して特に力を入れている点、その他の意見

3、質的データの分析と結果

今回おこなった調査でもちいたアンケート票は、自由記述による質問項目を多く設けた構成であったため、質的データ分析の手法のひとつであるKJ法（注1）をもちいて、自由記述の内容を分析した。図①は、KJ法をもちいて自由記述内容を図解化したものである。

開催を希望し実施するまでの各段階において、主催者は様々な課題を抱える。それらを段階ごとにまとめた図①を参照しつつ、自由記述内容を具体的に確認し

ていこう。

なお、以下では、図中の大カテゴリは『A』に、中カテゴリは『B』に、実際の記述を『C』にくくり検討をおこなっている。

A 主催団体の人的・経済的資源の課題

「離郷門信徒のつどい」を開催したいと決断した主催者は、開催のための様々な準備をおこなう必要がある。そこで課題として浮上するのが『主催団体の人的・経済的資源の課題』である。

主催団体の代表者の多くは住職であるが、つどいのように外部の施設で大規模な集まりをおこなおうとすると、『住職一人では時間的余裕もなく』、開催をためらう状況が生じてしまう。もちろん、つどいは一カ寺で主催するのではなく、いくつかの寺院や組単位で開催することも可能である。そこで『組全体の取り組み』として『多くの住職や坊守に参加してもらったり、『門徒役員や寺族をスナップとして多数参加』させたりして、

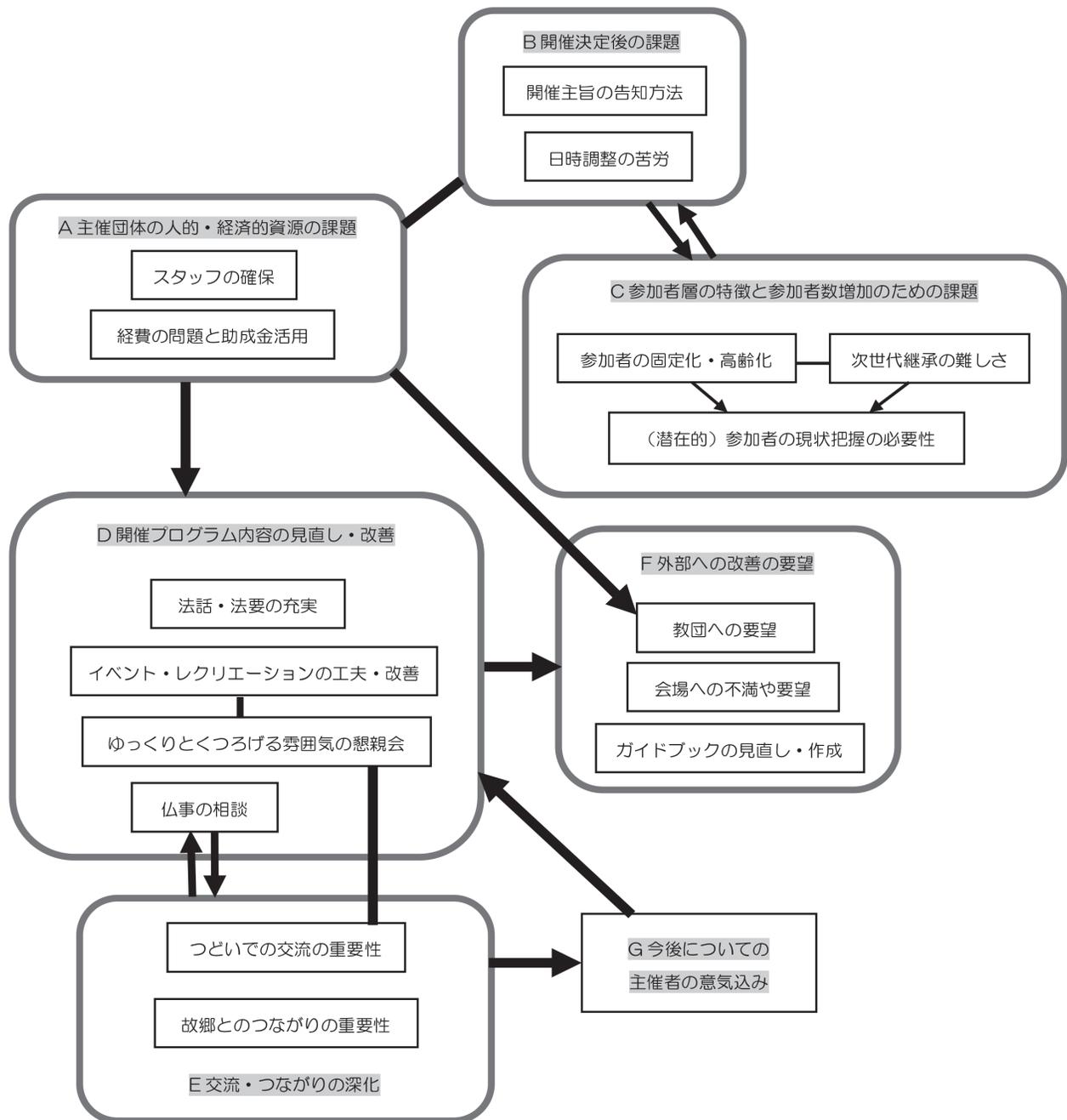
〈スタッフの確保〉の方法が模索される。

人的資源だけでなく、開催にあたっては『参加費、スタッフにかかる経費、記念品』などの経費も課題となる。スタッフを増やせば、その分の経費も増える。一方で、つどいへの参加者に負担をかけたくないという思いもある。そのため、経済的に苦しい状況が生じてしまう。

なお、経費の課題に対しては寺院活動支援部からの助成金があり、『助成金は大変助かっている』という声が多く寄せられた。〈経費の問題と助成金活用〉を、各主催団体がいかに乗り越えられるか、いかに教団がバックアップできるかが、つどいを継続的に開催するカギになっていると言えよう。

B 開催決定後の課題

具体的な開催準備の段階で、最初に課題となるのが『開催決定後の課題』である。開催が決定すると、まずは開催日を選定しなければならぬ。若者に参加してもらいたいと土日開催ということにな



図① 離郷門信徒のつどい主催者の意見集約の図解

るが、土日だと『法務の都合で住職の参加が難しい』という問題が生じる。

開催日とともに頭を悩ますものが、〈開催主旨の告知方法〉である。今回、郵送によって告知する方法が多かったが、『参加したいと思っただけの案内文』を作成しなければならぬ。後述するように、参加者の増加はつどいの最大の課題である。そのため、告知に関しても『築地本願寺のHPなどに掲載』『専用のお知らせ掲示コーナーの設置』などの要望が見られたが、いずれも決定的な解決法とは言いにくい。

今後、広く告知し、動員を可能にする方法について、宗派全体で様々なアイデアや利用可能なツールを提示していく必要があるように思われる。その他、告知を『早めに出すように』すべきだったという意見は、重要な示唆と言えよう。

C 参加者層の特徴と参加者数増加のための課題
前項で触れた【参加者層の特徴と参加者数増加のための課題】について、ま

めておこう。参加者アンケート調査（11月・12月合併号）で、参加者の平均年齢が66・3歳と高齢層が多いことが明らかになった。この現状に対して主催者側は〈参加者の固定化・高齢化〉の危機感を持つている。多くの主催者が『若い人びとの参加』や『新規参加者を増やすこと』が必要だと感じているのだが、解決は容易でなく、『門信徒の後継者（＝若年で新しく参加が見込まれる人々）と、どのようなつながりをもつか』に苦心している（次世代継承の難しさ）。

つどいを開催するには、都市部に住んでいる離郷門信徒に連絡をとる必要があるが、その『離郷門信徒の連絡先の把握』がそもそも難しい。複数の主催者がこの課題を抱えていたが、アンケートの記述からは良い解決方法が見いだせなかった。効果的な募集方法について調査し、他の主催者側に情報提供していくことが必要だろう。

また、連絡先を把握したとしても、継続して参加したくなるつどいにしなくて

はならない。その点について、『都会の方の問題点をもう少し理解していく』という記述が見られた。地方在住の主催者は、都市部在住の人々のニーズが分からないと感じているようだ。参加者アンケートや他の社会調査研究の結果をフィードバックするなど、ニーズに関する情報の発信が必要と思われる。

D 開催プログラム内容の見直し・改善
つどいのプログラムについては、多くの主催者から課題が述べられている。開催の大まかな流れは「離郷門信徒ガイドブック」等に記載されているが、細かな内容や時間配分等については各主催団体の裁量に任されている。会場を借りる際の時間制限等の中で、主催者はプログラムについて頭を悩ませている。

【開催プログラム内容の見直し・改善】は、大まかに3つに分類できる。ひとつは、『魅力ある法話にする』ことや『聴聞を大切にしたい』などの〈法話・法要の充実〉を指そうとする意見である。

次に、ゲームやアトラクション、マジックショーや落語などの〈イベント・レクリエーションの工夫・改善〉や〈ゆつくりとくつろげる雰囲気の懇親会〉に十分な時間をとるといふ意見も見られる。

『参加者同士が触れ合え』、『故郷の最新情報を伝え』たいという思いが背景にあるようだ。

第三に、『都市生活上での仏事問題（葬儀・法事・お墓など）も語り合』う場としたいという意見も得られた（〈仏事の相談〉）。

つどいは、離郷門信徒と寺院のつながりを主旨とする。単純に参加者の満足度を上げるだけでなく、都市部居住者の仏事に対する不安にかかわりながら寺院との結びつきを深めたいという思いが主催者の中にある。この内容については、参加者側（実際のニーズ）の調査結果と比較しつつ、検証する必要があるだろう。

E 交流・つながりの深化

参加者同士や主催者と参加者間のふれ

あいを重視している主催者も少なくない（つどいでの交流の重要性）。そのため、前項でも挙げた〈ゆつくりとくつろげる雰囲気の懇親会〉の必要性が強く意識されている。

つどいは、参加者の交流だけでなく、〈故郷とのつながりの重要性〉も意識されている。すなわち、「離郷門信徒―寺院」から、「離郷門信徒―ふるさと―寺院」あるいは「離郷門信徒―寺院―ふるさと」へと、つながりを重層的に深化させることが意識されているのである。

つどいが『郷土愛の心を養』い『故郷と関東（都市部）をつなげて』いく『橋渡しになる』ことができるのではないかと、主催者は期待している。『故郷の情報提供』をおこなうことで、ふるさとへの意識が育まれ、所属寺というだけではなく、ふるさとのお寺、という思いが生じ、信頼や愛着が醸成され、〈仏事の相談〉がしやすいふるさと寺院―離郷門信徒の関係が築かれる可能性が、主催者側の声の中に見ることができている。

F 外部への改善の要望

つどいを開催するにあたっては、担当部署や開催会場との連携が不可欠である。各部署との連携について、いくつかの要望が出されていた。

ひとつには支援についての要望である。『つどいの』会の為という何か特別なサービス』『記念品』といったサービスや物品などの支援、『会場に職員の方の補助』『担当部署のサポート』など人的資源面での支援、『築地本願寺をゆつくり案内してほしい』など文化資源活用のための支援、つどいの『代行事務局のようなサービス』を実施する等の運営のサポート面での支援など、支援に関する様々な要望が見られた。これらの背景には、最初に見た『主催団体の人的・経済的資源の課題』があると言えよう。

次に、〈会場の不満や要望〉も多く見られた。たとえば会場の設備に関して『イス席が良い』『経本を常備して頂きたい』『会場で使用する備品についてあらかじめ相談すればよかった』という要望

や、『参加人数に応じた部屋を借りる』

ことができるように求める意見、築地本願寺については『会場の案内が分かりづらい』など改善を求める記述があった。

これらの要望の中には、速やかに、かつ低コストで対応できるものも少なくない。円滑なつどいの運営、参加者の満足度の向上のために、対応が求められる。

最後に、〈ガイドブックの見直し・作成〉について見ておこう。『会のメニュー例などご提示いただければ』『開催方法などのアドバイスがもっと欲しかった』といったように、開催に関する具体例や注意点などを「ガイドブック」に盛り込むことが求められている。先に見たように、主催者は時間の使い方やプログラム内容に苦心している。「ガイドブック」には大まかな情報提供しかなく、開催内容について自由度が高すぎることで、主催者のとまどいとなっているようだ。今回の具体的な調査と分析を活用してFAQを作成するなど、ガイドブックの改善が期待される。

G 今後についての主催者の意気込み

前節まで、主催者が抱えている開催についての悩みや教団・宗門に対する要望等を取り上げてきた。では開催の手ごたえがなかったのかというと、そうではない。『よい縁づくりができた』『参加者からは好評』といった声も多い。『継続して開催していきたい』という意気込みも語られている。つどいの内容についても『きて良かった』とご門徒に思ってもらえただくには『魅力を感じてもらえるように』と、前向きな思いが見られる。関係各部署は、こうした思いをしっかりと受け止めて、つどいの発展を図っていく必要があるだろう。

4、考えられる支援

前節では、KJ法による分析を通して、つどい開催の際の主催者が考える課題や要望を抽出した。これらの分析結果をもとにどのような支援が可能かを、改めてまとめておこう。

(1) 物質的・金銭的なサポート

主催者はつどいの開催にあたって必要な労力やコストの課題に直面している。教団からの支援の形としては、以下のようなものが考えられる。

① 担当部を中心としたサポート体制の整備

準備段階では、相談窓口での丁寧な対応が必要である。特に初めての開催ではとまどうことも多い。また、当日の会場設営や案内などはどうしても人手が必要になる。そういった状況に労力を提供できるよう、人的支援をおこなう必要があるだろう。

② 会場設備に関する準備・対応

主催者の中には、ホワイトボードやビデオの使用を要請している場合がある。レクリエーションに関して、会場に特別な要望を出す場合もあるようだ。そうしたニーズに柔軟に対応できる状況作りを、担当部が会場と綿密に相談しながら整えておくと、より一層つどいの開催がスムーズ

ズになるだろう。

③助成金の充実

今後、つどいの重要性を評価し、開催数の拡大を図るならば、助成金の充実が求められる。

(2) 情報面でのサポート

①『ガイドブック』の改善（プログラムの実践例）

前述したとおりだが、ガイドブックを継続的に改善していく必要性がある。離郷門信徒のつどいの重要性を示すことも重要だが、それ以上に、開催のハードルを下げるための情報、特にこんな手順で、こんな中身で開催できるといった情報の提供が必要である。

②都市部在住者のニーズに関する情報提供

参加者は何を求めてきているのかを知りたいという声は多かった。都市部に住む人々の不安は何か、どのようなサービスの提供を欲しているの

か、について、宗教意識を收拾し発信する必要性がある。既にある社会調査データの活用から始めるべきではないだろうか。

③開催情報の発信

つどいの認知・評価、離郷門信徒への開催情報の伝達がなければ、つどいの広がり・継続的開催は期待できない。主催者側は常にこの壁にぶつかっており、宗派側の協力が必要と感ぜられる。つどいを知らせる媒体の開発や、ウェブサイトなどの宗派の発信機能、さらに「築地本願寺新報」「なごやにしべついいん」「御堂さん」など会場側が持つ情報発信媒体の活用が求められる。

5、参加者に対する

アンケート調査結果との比較

離郷門信徒のつどいでは、参加者に対してもアンケートをおこなっている。本節では、参加者アンケート調査の結果と

主催者アンケート調査の結果を比較して、意識のズレを検討してみたい。

参加者アンケート調査では、「つどいで楽しみにしていること」でもっとも回答が多く集まったのは「住職と会う（58・22%）」であった。この傾向は若年層でも高年層でも大きく変わらず（注2）、どの世代にも共有された思いであった。

しかし、それに次いで多かった項目は、年代によって違いが見られた。高年層では「同郷の人との会話（48・36%）」や「出身地の話題（36・57%）」であり、若年層ではそれらの2項目は20%程度で、「家族・親戚と会う（25・37%）」の方が数値が高く出た。

これに対して主催者には、参加者が交流し、都市部居住者を故郷につなげたいという思いが強く見られた。参加者が、参加者同士のふれあい・郷里を感じられる内容を楽しんでいないわけではないが、主催者側と「住職と会う」ことや法話を楽しみにしている参加者側の意識に

は若干のズレが見られる。特に若年層では、故郷での生活を経験していない人も含まれるため、ズレは一層顕著であると見えよう。

一方で「つどいに期待すること」については、参加者は「継続（68・62%）」が最も多く、これは主催者の「継続していききたい」という気持ちと一致している。この両者のニーズの一致を、ぜひ生かしていただきたい。

6、おわりに

「離郷門信徒のつどい」の開催には非常に多大な労力とコストがかかる。一方で、つどいが、地方の寺院の護持に貢献しているのか、またご法義の継承に有益なのかについては、今回の調査では十分に検証しきれていない。所期の目的に合致するののかという根本的な問題、さらには、目的と一致する効果的な「つどい」の形態はどのようなものなのかという課題については、今後さらなる調査研究が

必要である。また、そもそも「離郷門信徒のつどい」という名称自体に馴染みがなく、新たな人が参加しにくいという問題もある。宗派組織からの支援がどのような形で実現され、それらがつどいの開催にどのような効果を生んでいくかという点も含め、今後の研究課題としたい。

付記

離郷門信徒アンケート調査にご協力いただきました「離郷門信徒のつどい」の参加者の皆さま、主催団体の代表者の方々に深くお礼を申し上げます。また調査を実施した寺院活動支援部（過疎地域対策担当）の職員の方々には離郷門信徒の現状についてご指導を賜り、報告書執筆にたくさんのご助力をいただきました。感謝いたします。またKJ法をもちいた分析作業は総合研究所研究員・研究助手（那須公昭・菊川一道・小野嶋祥雄）の協力の下、おこなわれました。

（注1） KJ法は、文化人類学者・川喜田二郎氏によって考案された創造的問題解決のための技法である。文化人類学のフィールドワークをおこなった後、集まった膨大なデータをいかに統合していくかを試行錯誤していくうちに、この技法が編み出されたと言われている。ブレインストーミングでアイデア等を出しあった後にアイデアを統合し、新たな発想を生み出す際にも、このKJ法が有効であるとされる。

KJ法の簡単なプロセスを以下に示す。まず、収集したデータを1つ1つ、小さなカードに書き込んでいき、それらのカードをテーブル等にディスプレイする。次に、カードの中から類似しているもの同士を2〜3枚ずつ集めて小さなグループを作り、各グループにラベルを付ける。さらに、類似性を確かめながら、小さなグループから中グループ、大グループへと統合化していき、これらのグループ同士の関連性を図解化する。この図解をもとに文章化していくといったプロセスでKJ法による分析が完了する。

（注2） 若年層で54・34%、高年層で59・90%と、いずれの年代も5割以上の人が「住職と会う」ことを楽しみにしていることが明らかにされた。